

7. 17 後 記

昔から語り継がれてきた伝説や民話、それに、風俗、習慣、行事、生業等を記録して、後世に申し伝えていきたいという話が当地の高年配の方々から公民館へもたらせられました。当八幡公民館は、新築されて丁度十年。その記念として、誠に、格好な事業であるというので、それに取組むことになりました。

昭和五十七年二月に、その準備会を開き、十六名で編集委員会を構成しました。爾来、毎月一回、編集委員会を開催してきました。委員は、その周辺の年配の方々に、原稿の執筆や、資料の提供を依頼すると共に、自らも伝聞した昔のことや、自らの体験等々をまとめて持ちよりました。

こうしたことが、巷間に伝わり、新聞社からの取材もあって、その記事が載せられ、資料の収集は、日を追って増していきました。それらは、読み易いように、タイプ印刷にして、毎月の委員会で検討してきました。

資料は、記録として後世に残そうという趣旨にそったものばかりでしたが、それを証拠だてる材料が、すべて備わっているとは言えなかった。しかし、ある郷土史研究家から、「資料を証拠だてる材料がなくても、それが、その土地に伝え続けられ、今日に生きている事実を否定することはできない。…：」という励ましをいただいて、わが意を得たと喜んだ次第です。

「根も葉もないこと」と一笑に付されるかも知れない。しかし、それが現実に、語り継がれてきたという事実は、誠に貴重であると思います。資料から、この土地の曾ての雰囲気や、先祖たちの生きざま等々を読みとってくればよいと思っております。まして、当市の最近の大発展、大変貌ぶりは、誠に目を見張るものがある現状からも、そのほんの少し前の時代のことが空白の状態を知る術もないということでは、空しいことと思います。

資料の収集に際して、委員の方々には、大変な苦勞をされ、本当に有難く存じています。中には、「不詳な点は、現地へ飛ぶにしかず」という衝動にかられて、遠く、木曾岬、長島方面にまで赴かれ、勝手のわからない先方で苦心の取材をされた委員もありました。就中、おひとりで極めて多数の資料をまとめられた平松代吉委員さんのご熱意とその博覧強記ぶりには、全く頭がさがりました。

文章ばかりでは窮屈なので、さし絵風のもを提供してくれましたのは、山口泰三、神谷蒼風玉二の両氏でしたが、その御勞作に心からお礼を申しあげます。書物の顔に当る題字は、無理な注文を快諾してくれた立松節道氏の達筆であります。心からお礼を申しあげます。

文章表現を、どの程度にするかという点で最初から迷いました。余り平易に流れれば、冗漫になり、簡潔に走れば、その雰囲気が醸成されない。迷いながらも、一応は、中学校の高学年の生徒程度を対象に考えて表現してきたつもりです。しかし、漢字類は、その制限にとらわれずに使用してきました。

こうしたことから、寄稿者や、資料提供者の真意にできる限り添うように努力したけれども、中には、その意にそむく結果になったものもあったかも知れないので、そうした点について深くお詫びを申しあげます。

とも角、素人ばかりが集ってできあがったこの出版物であります。大方の意にそいかね

る点も多いであろうと、顧みて誠に慙愧に堪えない次第であります。しかし、取組んだこの作業の趣旨はどうにか貫けたと安堵の体もかくし得ない唯今であります。全くの末筆になって誠に失礼ではありますがこの作業のために貴重な原稿や資料をお寄せ下さった皆さんに心からお礼を申し上げます。

終

昭和五十八年十一月三日